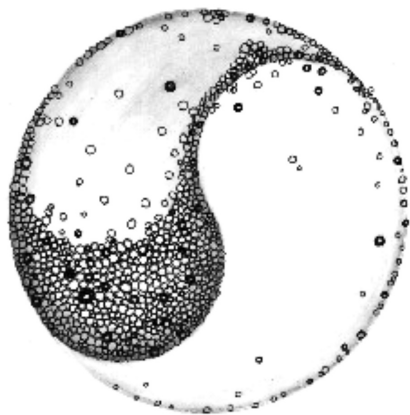


ほんとうのこと、
または、
でたらめの書



Book of change

カタ中央大学 ユウキ・シンダイ大教授

ほんとうのこと、または、でたらめの書

Book of change

カタ中央大学 ユウキ・シンダイ大教授
遊星出版

表紙・挿絵 白橋 升

目次

私自身の物語

本書の使い方

一　　一　　一八

二　　一　　二八

三　　一　　三八

四　　一　　四八

五　　一　　五八

六　　一　　六八

七　　一　　七八

八　　一　　八八

9

15

65

90

118

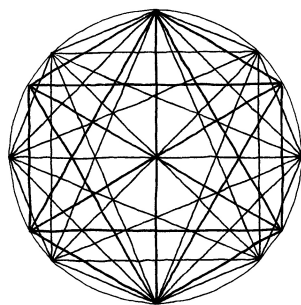
143

168

193

219

244



心からの問いには、ほんとうのことを。
それ以外の問いには、でたらめを。

質問の答えは一期一会。

ひとつの質問には、ひとつの答え。
なんども同じことをきくべからず。

私自身の物語

1 占術書

私はまだ幼かった頃、鉱山線で終点まで行つたさらに先の奥地に、ひとつの遺構が発見されました。

最初は単独の住居跡かと思われました。

しかしほどなく、それが集落であることがわかり、やがてその集落はひとつの国の一部であったことがあきらかになりました。

私たちの祖先です。

その後、その一帯での鉱石や金属、結晶、石炭などの採掘は実に一〇年もの間、遺跡発掘調査のために凍結されることになりました。発掘された国には中心地とおぼしき場所があり、その場所のさらに中心、おそらくは宮城のような中枢機関があつたあたりからは、おびただしい数の「文書」が発見されました。これらの「文書」は、近隣で容易に採ることのできる竹を使った竹簡に傷をつけることで文字が記されていました。

何人かの天才、偉才の登場もあり、古代文字で書かれたそれらの「文書」は採掘作業が凍結された一〇年の間にほとんど解読され、私たちの先祖がどうやら湖の向こうの未知の領域から

渡つて来たらしいことが、なんとなくみえるようになってきました。

発掘された大量の「文書」の中に、他のどの「文書」ともその性質を異にする奇妙な「文書」がありました。

その「文書」がこの本のもとなってます。

その「文書」には、他の「文書」であれば、ふつうはついている題名がありませんでした。著者名もなく誰が書いたかわかりません。

さらにこの「文書」の主役は書かれていた文章ではなく、そこに同時に記されていた切れた線とつながった線を積み重ねて作った六四種類の象徴^{シンボル}で、当初主体だと思われていた短文群は、象徴につけられていた注釈だったのです。

この「文書」が、なんのためのという「文書」だったのか、ということでは議論になることはありませんでした。

——占術書。

冒頭からそのように「文書」に謳^{うた}われていたため、占術の本であることは明白だったからです。

この「文書」の特殊性はその内容だけではなく、発見された場所が、当時、天と地の仲立ちをする^{する}と広く信じられていた為政者の個人的な住居であったということにもあります。

2 占術書との出会い

私の本職はエーテル・ラジオを使ったエーテル観測とその研究ですが、学生時代に上述の占術書を解読・解説した研究書を、カタ駅にほど近い、かげろう古書街でたまたま安価に手に入る機会があり、その神秘性ゆえにたちまちとりこになってしまいました。

占術書には象徴の説明のみならず、占術の方法から読み方の忠告^{アドバイス}まで、微に入り細に入り、懇切丁寧な説明がついていたので、ほとんどまどうことなく、特定の師につくこともなく、私は占術を利用することができるようになりました。その説明はまさに至れり尽くせりといった感で、いつてみればこの占術書自体が師のようなものでした。

主に個人的な領域に関してではありましたが、最初は半信半疑で始めたこの古代の占術というものは、誰がやってもということではないとは思いますが、私の場合は実によく的中しました。

以来私は、ことあるごとに（ひそかに）この占術にお伺いをたてるようになりました。自分の伴侶となる相手もこの占術がきかっけでめぐりあうことになりました。私自身もおどろきしましたが、もつとおどろいたのは、あとからそのことをきかされた妻だったのかもしれない。

占術書とのつきあいは、あくまでも私の個人的な趣味の範囲でありましたが、専門のエーテ

ル研究の分野でこの占術書の象徴体系が利用できるのではないかと、あるときふと思い立ちました。天象として観測されるエーテルの様相が、先に書いた占術書の象徴群と密接な相関を見せることに気づいたのです。

研究生時代のことでした。

当時の私の師ともいえる先生は非常に柔軟な考えの持ち主でしたので、ともすれば、インチキ扱いされかねない占術の象徴、象徴体系についての私の話を真剣に聞いてくれ、一言。

「とにかく、やってみなさい」。

なぜそのような相関があるのか。

それは残念ながら現在でもよくわかっていないのです。

しかし私が専攻していた工学の分野では「なぜか」ということがあまり深く問われることはありません。入力と出力をはつきりさせ、それを「どう利用するか」ということに焦点を絞った学問だからです。

私はその相関関係の研究で学位論文を書き、さらにその研究をおしすすめることで、現在の天象均衡化技術の基礎の一端を担う榮譽にあずかることができました。もちろんそこには、数々の先生方、同僚、学生諸氏の絶え間ない協力があつたからなのですが、その中核には常に、あの、遺跡から発掘された「占術書」があつたことはまちがいありません。

3 なぜこの本を書いたか

真剣に取り組むつもりであれば、みなさんもぜひ、みなさん自身の手で生きの占術書を手にとって、できればみなさん自身の力で直接ひもといていたきたいとは思います。とはいえ、相手は古代文字で書かれた大昔の文献です。研究書自体も学術書であり、一般の方々には価格的にも内容的にもなかなか近づきたいことも事実です。この占術書は大変よくできた独習教材でもあるわけですが、いかんせん大昔に書かれたがゆえの、現代の私たちにはそぐわない夾雑物的な記述も散見されます。しかし、この文献はこのまま研究機関の書庫で埃をかぶせたまま埋もれさせておくには、あまりにも惜しい、私たちの祖先から贈られた資産なのです。

少なくとも私はそう信じています。

その資産は、そのままで、むずかしい、わけのわからない過去の遺物にみえるかもしれませんが、その要諦を切り出し、表現を現代に通じるように書き直しさえすれば、現代の私たちにも充分利用可能な道具となり得るのではないかと思います。

そこで私は、あくまで私なりということではありますが、切り出した占術書の要諦から、さらにその「本質」に焦点をあて、古代文字で書かれた文章を極力わかりやすく翻訳して（場合によっては、文章を言い換えたり、並び換えたり、省略したりもしています。ご容赦くださ

い。そしてご先祖様、お許しください）、迷ったとき、悩んだとき、だれにも頼らず読者自身がそれぞれに適切な答えを得られるような、現代の私たちにも使いやすい占術書を改めて作ってみようと、不遜にもそのように目論んだわけです。

遺跡から発掘された占術書の背後には、なにかつかみきれない大きな原理、流れのようなものが横たわっているように感じます。

誤解をおそれずにいえば、あるいはその流れを「神」といつてもいいのかもしれませんが。

しかしそれは、おそろしいものでもなければ手に負えない怪物でもないとも思います。

それはあたかも母のように私たちを包んでくれる存在なのです。

あるいはまた、いちばん近くて気がつかない、自分という存在を成り立たせている自分の背中のような、自分というものすらその一部であるような、巨大な「なにか」なのです。

私ごときにその「本質」がつかみきれるものなのかどうか、皆目わかりません。

——とにかく、やってみなさい。

今はこの師の言葉を思い出しつつ只謙虚に皆様にごこの小著を献上させていただくばかりです。さて、長すぎる前書き、私自身の物語はひとまずこれでおしまいです。

ここから先はぜひ、読者であるあなた自身の物語を紡いでいってほしいと、切に願ってやみません。それでは、よき旅を。

本書の使い方

1 「問い」を立てる

青い正八面体のサイコロひとつ、赤い正八面体のサイコロひとつ、さらに、ふつうの白い立方体（正六面体）のサイコロをひとつ、全部で三つのサイコロを用意してください。

この三つのサイコロと本書を常に持ち歩くこと。

そんなところから、あなたの「物語」ははじまっています。

サイコロがバラバラになつてしまつては困ります。ですので、サイコロを入れる袋も必要になつてくるでしょう。本書も一緒に入れられるような袋があればなお便利かもしれません。

あとはこの占術専用のノートかメモ帳を準備してください。

細かいことはあなたにおまかせします。

道具を含めた環境を整えるためにお金をかけるかどうかということは、あまりおおきな問題ではありません。いつでもこの占術を試すことのできる道具、ご自分がつとも「ここちよい」と感じられる環境を整えてください。切羽詰まった深刻さや緊張はこの占術の大敵です。

そして、「問い」を立てます。

無理に「問い」を立てる必要はありません。

聞いたいことがなければ本書の出番はありません。

それはそれで大変結構なことです。

その時のあなたが平安で、安らいでいる証拠です。

しかし、本書を手にした以上、おそかれはやかれ「問い」はかならず「問い」の方からやってくるでしょう。

どうしたらいいだろう。

右か。左か。

なぜそうなるのだろう。

そして、今現在こうあるこれは、どのように変化していくのだろう。

「問い」に優劣はありません。

「私が生まれてきた目的はなにか、どうして私はここにゐるのか」というのも「問い」ですが、「今晚何を食べたらいいいですか」というのも立派な「問い」です。

ここであなたが、占術書が依って立つ「原理」から暗に「問われて」ゐるのは、あなたの「問い」がいかに純粹でいかに自然にわきあがってきたものか、ということなのです。

これが本書の冒頭の献辞、「心からの問いには、ほんとうのことを。それ以外の問いには、でたらめを」の意味です。

いいかげんな「問い」であっても、寛大な「原理」は答えを返してくれます。しかしその答

えはいいかげんな「問い」に見合ったいいかげんなものになるでしょう。反対に純粹で真剣な（深刻な、ではなく）「問い」に対しては必ず「原理」は真摯な回答をよこすはずです。

問いがやってきたら、まずはその「問い」を文章に起こしてみてください。

用意したノートかメモ帳に問いを書いてみるのです。この時点で文章にならない「問い」もあるでしょう。それはその「問い」がまだちゃんとした「問い」になっていないということでしょう。もう少し時間をおいて、あらためて文章に起こしてみるか、そうこうしているうちに消えてしまうかもしれません。もしそうだとしたらそれは、問うに足らなかつた問い以前の、うたかたのような無数の想いのうちの単なるひとつだったということです。

忘れましょう。占う必要はありません。

もうひとつ考えられるのは、そうして「問い」を文章に起こしている間に自然と答えがわかってしまうという場合です。この場合もわざわざ占う必要はありません。自信をもってその答えにしたがってください。

「答えはすでに質問の中に含まれている」

この格言は往々にして真実のようです。

2 サイコロをふる

「問い」が形にならないこともなく、「問い」の答えが自ずから氷解することもなく、「問い」を文章にできたなら、ノートに今日の日付と時間、そして「問い」を書き出し、じつと心を落ち着けます。

川から汲み上げてきたバケツの水の中の砂がすべて底に落ち着いて、さらに波だっていた水面が静かになり、バケツの底になにがあるか、よく見えるようになるまで待つのです。

答えはそのバケツの底に横たわっているのです。

これからやろうとしていることは、そのバケツの底にちらばった砂や砂利に、ある一定の形をあたえて読みとろうとすることなのです。

回答を受け取るために充分に落ち着いたと感じられたら、用意した三つのサイコロをゆつくりととりあげ、両手で包み込むようにしてよく振りながら「問い」に集中します。「問い」への集中が頂点に達したところで、両手を開きサイコロをテーブルに落とします。音が気になるようでしたら、あらかじめテーブルに布を敷いておいた方がいいかもしれません。そうしたら落ち着いて、テーブルに落ちたサイコロの目を読みとります。

青のサイコロ（一〇八の目があります）を百の位、
赤のサイコロ（一〇八の目があります）を十の位、
白のサイコロ（一〇六の目があります）を一の位、

として、三桁の数字をつくります。

これが答えなのですが、これではまだ三桁の数字が目の前にあるだけで、意味がわかりません。

意味は、次の章からの記述を読んで調べます。

例をあげて説明しましょう。

たとえば、青のサイコロが「三」、赤のサイコロが「二」、白のサイコロが「六」になったとします。

すると三桁の数字は「三一六」になります。

次の章からの記述はこの数字が小さい方から大きい方へととならべてあります。

各章は上二桁の数字、八つごとにまとめてあります。目次を参照してください。

この場合は、上二桁は「三一」ですので、「三一〇三八」の章にある、「三一」の項目を読みます。

「三一」の項目を開きますと、そこには「三一 G14 おおいなる財産」「もとより、さえぎるものなし。」とあります。これが第一の答えです。

※ G01～G64の数字は、この段階では無視してください。この数字の意味については「8 大^{グレイ}時間^{トタイム}」で説明しています。TP01～TP32の数字も、この段階では無視して結構です。この数字の意味については「追記 反^{ツイストベア}転対」で説明しています。「上 三 かえる力」「下 一 おどる力」も同様です。この「上」「下」の記述の意味については「5「しるし」と「もよう」の関係」で説明しています。

意味がわからない？

答えになってない？

いろいろ感じるとは思いますが、あわててはいけません。

まずはノートに書き出した「問い」の下にサイコロを振って出た数字を上二桁を書き出して、数字のところに書いてあった言葉、文章を書き出します。

つぎに白いサイコロの目、一の位の数も含めた三一六の項目を見ますと、そこには「三一六 天が手をさしのべる。自然の流れにのっている。」とあります。この三桁の数字と文章も書きだします。

「三一 おおになる財産」「もとより、さえぎるものなし。」
「三一六 天が手をさしのべる。自然の流れにのっている。」

三一六という「数」は、とりあえず「言葉」になりました。
これが「お告^{オラクル}げ」です。

これがこの例における、あなたの「問い」に対する占術書が依って立つ「原理」からの答えです。

上二桁の数字に付けられた言葉と文章が、答えの全体状況をあらわします。

最後の白いサイコロが示す数字が、この全体状況における、さらに詳細な状況をあらわします。

3 判断する

どうでしょうか。

運がよければ、すぐに意味がわかることもあります。

『あ、このことを言っているんだな』と即座に腑に落ちる。

この場合はこれ以上の説明は不要でしょう。その判断にしたがってください。

私自身のとぼしい経験から言うと、多くの場合、本書に記された文章がそのまま答えになっていることはまずありません。読みかえが必要になってきます。

例で話を続けさせていただきます。

全体状況としては「三一 おおになる財産」「もとより、さえぎるものなし。」とありますが、まずはこの「財産」というのがなにを指しているのかということがカギになるでしょう。単純にお金ということもあるでしょうし、あるいは時間、地位、機会、人脈……さまざまなことが考えられます。想像力を使って自由に発想をふくらませてください。

そしてその中からこれだと思われるものをつかみとるのです。これだと思われるものがなくても、たぶんこれなのではないかと自分が思えるものを取りあえずは書き出して、仮の答えとして判断を進めます。

占術書が依って立つ「原理」がなにをいつているのか、最初のうちは心もとないことも多いでしょうが、何度も繰り返しているうちにだんだん上手にできるようになってきます。よく言われることです。が自転車に乗る練習と同じことです。いったん要領を得てしまえば、あとはもう自然に勘所をおさえることができるようになります。

例にもどりますが、注意していただきたいのは「財産」といつても必ずしも「いいもの」とは限らないということです。この財産をお金と判断したとしても、負の財産ということもあります。早急に「いい」「悪い」ということにこだわり始めると判断を誤ります。たしかに、占術書の本文中には「よくない」とか「よろしい」の記述はあります。「もとより、さえぎるものなし」などと言われると、無条件によいことのようにも思えてきます。しかしそれらの記述とて、陰は陽に、陽は陰に「必ず」変転するということのようにも思えてきます。しかしそれらの記述うはすがないのです。「もとより、さえぎるものなし」は、「本来さえぎるものなどない」の意味ですが、その後「のだけれども……」というニュアンスを含んでいるかもしれないのです。

「いい」「悪い」はとりあえずはおいておきましょう。

いや、場合によっては、最後まで「いい」「悪い」は決める必要はないかもしれません。

もし「いい人生」と「悪い人生」というものがあつたとして、その「いい」「悪い」はいつたいどこで決まるのでしょうか。わたしは人生のことなど占つてはいませんよ、とおつし

やる向きもあるかもしれませんが、相手が人生であつても今晚のおかずであつても、宇宙全体から見れば変わりありません。「原理」はすべてに等しく働きかけるからです。

全体状況が把握できたら、こんどはその全体状況の中より詳細な状況をみていきます。白いふつうのサイコロが示す数字も含めた三桁の数字のところに書いてある文章または言葉を、全体状況をみたときと同様に判断していきます。

例では、「三一六 天が手をさしのべる。自然の流れにのつている。」となつていきます。わざとそうしたわけではないのですが、これは比較的わかりやすい例だと思います。わかりやすいというのは、どんな問いでもあつてもあてはまりやすいということです。しかし注意してください。くりかえしますが、この文章は一見いいことのように思えますが、「いい」「悪い」の判断を安易にしないことです。

「自然の流れ」といつても嵐や災害のような過程もあるのではないのでしょうか。均衡をとりもどすという意味で「天が手をさしのべている」ということであつたとしても、渦中にいる、大局的な視点を持たないものたちにはなかなかそのことがわからない、または、とてもではないけれども、「手をさしのべている」ふうにはみえない悲惨な状況であることもあるかもしれません。

それでも、天は「手をさしのべている」のです。

信じられないかもしれませんが。

わかりやすい言葉、文章ならいいのですが、なかには手強い言葉、文章もあります。いろいろ想像をふくらませて、答えをつかみとうとするのですが、どうしても答えがわからない、あるいは、わからないとまではいわないけれど、自分の判断がしっくりこないことがあります。そういう場合は、いったん休息しましょう。

とりあえずの判断でも結構です、その時点での自分の判断・考えを記録して（これは重要です）、いったん区切ります。占術を生業にしている鑑定家の場合はこうはいきません。目の前にお客さんがいるからです。しかし、あなたはそうではない。あなたは、あなたの手であなた自身の物語を紡ぎだそうとしている旅人です。

誤解しないでいただきたいのですが、判断をあきらめてしまうということではありません。おどすつもりはありませんが、本書を手にした以上、旅をやめることはできないのです。時間をおくことで、状況が変化するかもしれないし、ちがった角度から判断することができるかもしれないから、休息をとるのです。その「問い」に関連した別の「問い」がやってくるかもしれません。特定の「問い」に対する判断（答え）が完結する前に次の「問い」がやってきた場合は、ノートの、前の「問い」と次の「問い」の間に空白をあけるようにしてください。あとから適切な判断ができたとき、それを記録するためです。

場合によつては、時間とともに「問い」自体が周囲の空間に溶けてしまうように雲散霧消してしまうこともあるかもしれません。そんなときは「問い」は「問い」でなくなったのかもしれませんが。つまりあなた自身がその「問い」より「大きく」なったのかもしれないということです。自らミルクを飲めるようになった子供は、哺乳瓶の在^{あり}処^かを問うことはなくなるでしょう。自分で自分のカップを手にして、ことによると母親に頼むこともなく、自分で冷蔵庫を開けミルクをカップに注ぐことができるようになっていくかもしれないからです。

もはや「問い」でなくなつた「問い」も、その旨をノートに記録しておきましょう。記録は、その先すべての「問い」に対する答えをつかみとるための資産になります。

4 占術書の象徴体系

もとの占術書の本体である、象徴に関連したお話をしておきます。

「本体」なのでから本来は一番最初に説明しておくべき内容なのかもしれませんが、まずは本書を使っていたくことが先決と考え、このお話はここにもつてくることにしました。

ここから先は、ある程度、この占術に慣れてからお読みになった方がいかもしれません。

占術書における象徴はすべて、切れた線またはつながった線を積み重ねて構成されています。切れた線は「陰」、つながった線は「陽」と呼ばれます。「陰」または「陽」はエーテルの状態をあらわす最小単位です。エーテルには、ある「基準状態」ともいえる変化可能性の状態があり、この「基準状態」では何も起きません。と同時に、あらゆることが起こりえる状態でもあります。「あらゆることが起こりえる」と「なにも起きない」は表裏一体なのです。

「陰」または「陽」はこの状態からの最小の「ずれ」であり、万物という現象を引き起こす基本単位です。なにか特定のことが「起きた」ということです。いかなるものであれ測定でき、目に見え手に触れることのできるありとあらゆるものは、すべてこのエーテルの「ずれ」から成り立っているともいえるわけです。例外はありません。あなたも、わたしもです。ここでは

ひとまず、この話題はこのへんにおきましよう。

占術書における象徴には、切れた線またはつながった線（単に線ともいいます）三本の積み重ねでできた「しるし」と、この「しるし」を二つを積み重ねてできた「もよう」があります。線には、切れた線とつながった線の二種類があるので、「しるし」は全部で $2 \times 2 \times 2$ 、八種類あることになります。「もよう」は「しるし」二つでできているので全部で 8×8 、六十四種類あることになります。これが、占術書における象徴体系のすべてです。

占うときは青と赤の正八面体のサイコロ二つを使いますが、正八面体ですから、そこに書かれた数は一〜八。この数が「しるし」の一〜八に対応していたというわけです。

青いサイコロの番号が上の「しるし」。

赤いサイコロの番号が下の「しるし」。

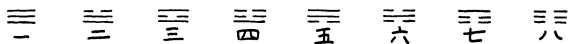
このふたつの「しるし」でひとつの「もよう」ができます。

白いサイコロは立方体ですから、そこに書かれた数は一〜六。この数が「もよう」を構成している六本の線に一〜六の順番で下から対応しています。

あるひとつの「もよう」は、あなたの「問い」に対する答えそのものです。

あなたの「問い」に対する答えには象徴（「しるし」と「もよう」）を含めて次のような構成要素があることになります。

8つの「しるし」



64の「もよう」



- A 上の「しるし」（青いサイコロの1～8の数に対応）
- B 下の「しるし」（赤いサイコロの1～8の数に対応）
- C AとBから構成されるひとつの「もよう」
- D 「しるし」のどの線かを示す数字（白いサイコロの1～6の数に対応）
- E 三桁の数字のうち、上二桁（「もよう」）につけられた言葉と文章（全体状況）
- F 三桁の数字につけられた文章または言葉（詳細状況）

例としている「三一六」の場合、次のようになるでしょう。

- A 三の「しるし」
- B 一の「しるし」
- C 三と一でできた「もよう」
- E 三一「大いなる財産」「もとより、さえぎるものなし」
- F 三一六「天が手をさしのべる。自然の流れにのっている。」

絵を参照して「しるし」と「もよう」を確認してください。そして、それを紙に書き出して

みて
くだ
さい。

5 「しるし」と「もよう」の関係

答えの「全体状況」をあらわすE「三一『大いなる財産』『もとより、さえぎるものなし』」が、Cの「もよう」に対応していることがわかると思います。「もよう」は「問い」に対する概要的な答えであり、その時のエーテルの状態をあらわすのです。

この全体的な状況は、ふたつの「しるし」から成り立っています。全体状況というのは物事がかかなり具体的な形になって目に見えるようになったエーテルの状態をあらわしています。

その時はもうエーテルではなく、なにかの具体物や出来事になっています。だから私たちはそれら目に見える具体物や出来事をヒントに占うことができます。この具体物への成り始め、最初のきっかけのようなものを「兆し」といいますが、「問い」が生じるということ、サイコロをふるということ、サイコロにより特定の数字が示されるということも、すべて、「兆し」に含まれているのです。

そして、全体的な状況には、目には見えないけれど、「しるし」で示されるふたつの力が一定期間働き続けます。「もよう」で示される具体的事象の背後に働く力ともいえますが、背後というよりも「種」のようなものです。

近年、人工結晶の製造技術が進み、結晶を人工的に造ることができるようになりました。エ

ーテル・ラジオの部品への応用なども検討されています。この人工結晶を造るには結晶のもとになる材料を溶かし込んだ過飽和溶液に「種」になる結晶を静かにつけこみます。これを種結晶といいます。このようにすると種結晶の周囲に種結晶と同じ並びを持った粒子が析出し結晶ができます。いわば種結晶の「記憶」が周囲の空間（この場合は溶液）に伝播して周囲の空間が結晶化していくわけです。

同じようなことが、目にみえないエーテルが形を持って私たちの目の前に現れるときにも起きます。「しるし」で示される力は種結晶のようなもので、事象が抽象的領域から具体的領域に現れるものになる衝動、傾向ともいえます。この「種」自体は何らの具体的なイメージを持っていません。

エーテルは全存在の根源です。

結晶の話は物理的領域の話ですがエーテルはすべてです。振動数が高いものから低いものへの析出は、物理的領域でも、魂的領域でも、霊的領域でも、すべての領域において同様の過程で起こっていることなのです。

八つの「しるし」が示す力は具体的に直接つかみとることはできません。つかみ取ることができるということはそれはすでに具体的ななにかになっており、その具体的ななにかは力そのものではないからです。種結晶ができあがった結晶と同化してしまい、できあがった結晶——最終成果物を目の前にしているかぎり、種結晶そのものには決してふれることができないこと

とよく似ています。

八つの「しるし」が、具体物が具体物になるための、おおもとの衝動、傾向をあらわすとしたら、それぞれのような衝動、傾向なのか。

先人はなんとかわかる範囲でそれらの衝動、傾向を言葉として残してくれています。それを次に示します。

- 一 おどる力、風
- 二 よろこびの力、風
- 三 かえる力、火
- 四 すすめる力、火
- 五 いきわたる力、水
- 六 ながれる力、水
- 七 ささえる力、土
- 八 うみだす力、土

風、火、水、土は古来から伝えられている四元素エレメンツであり、これにエーテルそのものである「空」を加えて五元素となります。四元素との対応は私が独自にとったものあることをおこと

わりしておきます。占術になれてきたら、この背後にある力も考慮していただくと、占断にあつみを持たせることができるでしょう。

6 「もよう」と時間の関係

「もよう」は六本の線が積み重なってできています。時間を考慮する場合、この積み重ねがそのまま時間の流れになります。すなわち、一番下の線から一〜六の番号をそれぞれの線にふつた場合、それぞれの線は、全体状況の中における次のような段階を示していると観ることができます。

- 一 その「全体状況」の始まり
- 二 その「全体状況」における前半の安定
- 三 裂け目の前の不安定な段階（これから裂け目を渡らなければならない。緊張がある）

下から三番目の線と四番目の線の間には、河のような、あるいは溝のような裂け目ギャップが想定されています。この境界はまた、ひとつの「もよう」を構成する上の「しるし」と下の「しるし」の境界でもあります。

- 四 裂け目を越えた後の不安定な段階（やっと裂け目を渡り終えたばかりの段階。緊張が残

る)

五「その全体状況」における後半の安定

六「その全体状況」が終わりつつある段階

白い立方体のサイコロが示す数が一〜六の段階をあらわします。

おのおのの線につけられた文章または言葉は「原理的に」右の一〜六の段階を踏襲しますが、かならずしもそうなっているようには受け取れない文章、言葉も多々あることをここでお待ちしております。

また、時間の流れという観点からみても、単純に「いい」「悪い」をいうことはできないことがわかれると思います。「いい」「悪い」は（もし判断に取り入れるとするなら）その場合の「全体状況」が、いったいいかなる状況をあらわしているのか、その判断によるからです。

例で説明すると、三一には「大いなる財産」と言葉がつけられていますが、「負の財産」ということも考えられる、というのは先にお話ししたとおりです。たとえば、「もよう」の六番目の線は「その全体状況」が終わりつつある段階をあらわすとされていますが、例の場合、通常の「正の」財産を受け継ぐことが終わりつつあるとすれば、それは、受け継いだ財産を使い果たすことかもしれない、「負の」財産を受け継ぐことが終わりつつあるとすれば、受け継いだ債務の弁済が完了しつつあることかもしれません。どちらが「よく」てどちらが「悪い」ので

しょうか。一概にはいえません。

ひとつの「もよう」における一〇六の線は、それぞれどのくらいの時間の幅を持っているのでしょうか。おどろかれるかもしれませんが、もとの占術書にはその尺度に関する規程は特にみあたらないのです。

一本の線は一時間かもしれないし、一日かもしれないし、一か月かもしれないし、一年かもしれないし。規程がないということはそのどれでもよいということです。

たとえば、「もよう」ひとつを一日と観たてたなら、下の「しるし」を午前中、上の「しるし」を午後、下の「しるし」と上の「しるし」の間の裂け目をお昼（正午）とするような、そんな観方もなりたちます。

一本の線をどのくらいの長さの時間幅と観るかは、何を占うかによって、直観的に決めるほかありません。

7 エーテルの形而上学

どうしてもとの占術書には時間幅に関する規程がないのでしょうか。

このことを説明するには、エーテルとはなにかについてお話しなければなりません。さまざまな秘教的伝統には「エーテル」という同じ呼称を持つさまざまな概念がありますが、それらについてよくご存知の方も、今はいったんそれらの概念は傍らに置いて、これからのお話を読んでいただければと思います。

先回りして申し上げておくと、エーテルとはなにかという問いに答えはありません。

エーテルとはあらゆるものだからです。

まず、時間の流れというものがひとつではないということを確認しておく必要があるでしょう。

人間を構成する物理的な体である肉体と、感情の体である魂体、思考の体である霊体とはそれぞれ感じる時間の速さがまるでちがうのです。

同じ物理的な世界でも、鉱物、植物、動物ではそれぞれ時間の感じ方がことなります。ひとつにはこのことが、占術書に時間幅に関する規程がない理由といえるでしょう。しかし、鉱物

や植物、動物がこの占術を利用するわけではありません。占術書は（おそらくは）人間が、人間のために書いたものです。であれば、その時間尺度は一人の人間の一生——八十年から九十年程度——の範囲をでることはなく、人間の一生の範囲で規程されることになります。

しかしながら、先にふれましたとおり、人間は肉体だけでできているわけではありません。秘教的伝統によれば魂体は複数の肉体に現れているといえます。魂の領域では、いま私たちがばらばらの個人だと見えているものはずいぶんとちがったように「見える」ことでしょう。さらに同様に霊体は複数の魂体に現れているといわれています。このことはつまり、人間の構造を、肉体↓魂体↓霊体とたどるにしたがつて、「個人」と思われている領域がどんどん希薄になっていくということがいえるのではないのでしょうか。物理的領域における個人は歴然と特定の時間と場所を占めており、それはゆるぎないことのように思えます。しかし上述の構成たどっていくと、人間という存在はその境界、占める範囲、感じる時間等々が、物理的領域から見ると、どんどんおぼろげに拡散していくように見えるのです。

エーテルはこのすべてに現れています。

それはつまり、おおもとをたどればすべてエーテルだということです。

エーテルの階層^{レイヤ}で観た世界には境界で区切られた領域はありません。つまりそこには「時間がない」のです。時間は、ある区切られた領域がある場合に、その領域の寿命を基盤として生

じる、その領域内部から外側を観た場合の、その領域特有の認識——意識ということができるとしよう。

エーテルの階層ではあらゆる存在は「基準状態」にあり、占術書の象徴における最も基本的な構成要素である「陰」と「陽」はこの基準状態からの「ずれ」であり、現象しているあらゆる被造物の根本的な材料であることは先に述べたとおりです。いつてみれば目に見えるすべては「ずれた」エーテルから成り立っているのです。

「しるし」や「もよう」という象徴を観る際に最も重要なのは、「陰」は「陽」に、「陽」は「陰」に、必ず、常に、変転するという法則です。

この根本的な構成要素である「陰」と「陽」の階層で観た場合、やはりそこに時間は存在しません。くりかえしますが、時間はある階層に境界が生じ、その境界で囲まれた領域ができたときにその領域を基盤としてはじめて生じるのです。

占術書の象徴で説明するなら、単独の「線」のみに注目する階層では時間はないということです。この「線」がふたつ集まってできる単位ではじめて、エーテルの階層に領域が形成されることになります。原始的な時間をはじめてそこで生じるわけです。

この二つの線でできた単位にもう一本の線が加わった単位では、先の原始的な時間の流れを含んで越える形で、さらに具体物の階層に近づいた時間が生じます。三本の線——種結晶、

「しるし」の階層です。

「しるし」がふたつ集まって「もよう」を構成します。「もよう」はもう、しつかりと目に見える具体的な事象の単位シンボルです。ここでは六本の線でできた領域があり、六本の線であらわされる具体的な状態があります。この階層で生じている時間こそが、私たちが普段感じている日常的な時間というわけです。

例に戻りましょう。

「三一 おおなる財産」の「しるし」はノートに描きだしていただけたでしょうか。では、その「しるし」をよく観てください。

下から順番に、一陽（つながった線）、二陽、三陽、四陽、五陰（切れた線）、六陽、となつていくはずですよ。

よろしいでしょうか。

エーテルの階層で観ると、これらの陰は陽に、陽は陰に「常に」変転する可能性があります。

描きだした象徴をよく観てください。

下から五番目の線だけが陰、切れた線であらわされていますが、これはこのように決して静止しているわけではないのです。

たとえば、この五番目の線（陰）が、陰↓陽になったとしたらどうでしょう。するとこの「もよう」はたちまちその姿を変えて「一一 力」の「もよう」にならないでしょうか。単純な例ですが面倒がらずに「もよう」を描きだして確認してみてください。

ここであげたのはたった一本の線が陰↓陽に変化した例ですが、たった一本の線が変化しただけで「もよう」はその様相をがらりと変え、まったくちがった意味を持つ象徴になるのです。そしてこの陰↓陽、陽↓陰の変化は五番目の線だけで起こっていることではなく、時間が存在しない階層で一く六のどの線においても常に起きている運動なのです。

冒頭の章で、もとの占術書には題名がないと書きました。しかしそれでは不便なことも出てきたのでしよう。正式な題名はないままだったのですが、後世になると他の「文書」の中で「変化の書」と呼びならわされるようになりました。その呼称の由来がこの象徴の変化にあるのです。象徴が変化するというよりも、宇宙の実態として「常に変化する」ということがその中核にあり、その変化を人間の意識にもとらえることができるようにするために創り出された象徴体系システムという意味でつけられた呼称といった方がより正しいでしょう。

端的にいつて時間は変化です。日時計は地面に立てた棒の影が「変化かわする」から時間がたつたということが判るわけです。機械式の時計でも同じことです。もし太陽が天空で位置を変えず、機械式の時計の針も動かないとしたら、私たちには、今は何時なのか判らないのはもちろ

ん、時間を量として「測る」ということもできないはずです。

陰は陽、陽は陰に常に変転する「可能性がある」と書きました。

これは、たとえば仮にであつても象徴を一時的に静止したものとして観なければ、判断している余裕すらなくなってしまうから、そのような表現にしたのです。実態は「可能性がある」というよりも、変化は間断なく起こっています。ですから、陰乃至陽は固定的に観てはならないという意味で「変化する可能性がある」、静止しているように見える象徴を、いつ別の象徴に化けるかわからないものとして、そのように心がけて観た方がいいという意味でこのような表現にしたわけです。

巨視的な階層や、たとえば鉱物や植物を人間の意識がとらえる過程では、^{プロセス}「静止している」という一定の時間幅を仮定することもできますが、それでも常に変化は起きているのです。何一つとして「止まっている」ものなどありません。

間断なく常に変化が起こっているとすれば、変化を、仮に、一時的に、象徴として静止させてとらえるにしても、まったくとりとめのないものにならないでしょうか。

先の例では「三一 おおいなる財産」が「一一 力」に変化する例を説明しましたが、「もよう」における一六のどの「線」でも、陰なら陽、陽なら陰に常に変化してまうなら、「三一 おおいなる財産」は「三一」以外の、残りの六三種類の「しるし」のどれにでもいつでも

変化してしまうことになります。言い方を変えたとこのことは、「三一」というのはあくまでその瞬間におけるエーテル状態の「断面」であって、その瞬間の答えとして「三一」という「断面」が得られたということなのです。占術書からのすべての答えは、その時どんな「もう」を答えとして得たとしても、その背後に他の六三種類の答え（「もう」）が隠れているということを、常に意識しておかなければならないということなのです。

占術という観点からいえば、いつもそうではありませんが、そこに予測という側面が含まれることを避けることはできません。陰は陽に陽は陰に常に変転するという状況下で、変化の予測などほんとうにできるのでしょうか。エーテルの階層で、ただその状態を観ているだけでは、確かに「予測」はなりたちません。「三六 混沌^{カオス}」なにもないようにも観える、あらゆる可能性」という象徴はそれをあらわしています。なにひとつ確かなものなどない状態です。ここに秩序をあたえるのが、境界で囲まれた領域から境界の外を観たときにたちあがる銀幕^{スクリーン}、界面ともいえる「意識」です。「意識」は領域があるところには必ずたちあがってきます。

占術書の象徴、六本の線でできた塊がこの「意識」をあらわしています。一見無秩序にみえる陰陽の変転を、秩序だった六本の塊として取り出して観る作用、働きそのものが「意識」であるということもできます。目で見えて手で触れることのできる物質、感じることできる日常的な時間は、すべて意識をとおして、この「（人間の）意識の階層」においてたちあらわれて

きます。この意識の働きをあらわす象徴が「六三 秩序^{ロゴス}。構造を成り立たせる界面」で、先に述べた「三六 混沌^{カオス}。なにもないようにも観える、あらゆる可能性」と対を成す象徴です。

「意識の階層」の働きとしては、象徴的にいえば、ばらばらに陰陽反転する三八四本の線であらわされるエーテルの状態から、六本の線をひとつのまとまりとして取り出し、さらにそのまとまりにおいて、下から上への積み上げ式の変化を「時間」という感覚として読み取る働きがあるということです。六本の線で象徴される事象を観て取った後、一番下の、一の位置にある線が根源であり、変化はここから始まるように意識はとらえるわけです。

一↓二↓三↓そして裂け目、四↓五↓一番上の六の位置にあたる線まで、順次積み上げ式に陰陽の反転は進んでいきます。これが「6「もよう」と時間の関係」で説明させていただいた時間の流れです。

六の位置まで陰陽の反転が進んだ後はどうなるのでしょうか。

もとの象徴は、一〜六までの線の陰陽反転がすべて終わっていて、それぞれの線の陰陽関係がまったく逆の別の象徴になっています。今度はその別の象徴における一の位置から、また同様の過程が繰り返されるのです。この過程が終わると、別の象徴は、またもとの象徴に（象徴の上では）戻ることになります。これが「周期」です。この周期の上において、はじめて予測というものが成り立ちます。一の位置にある線に変化が起こった後は、続いて二の位置にある

線に変化が起き、さらに続いて三の位置にある線に変化がおきます。エーテルの階層における自由奔放な変化を、意識がそのような秩序だった変化として観るのです。

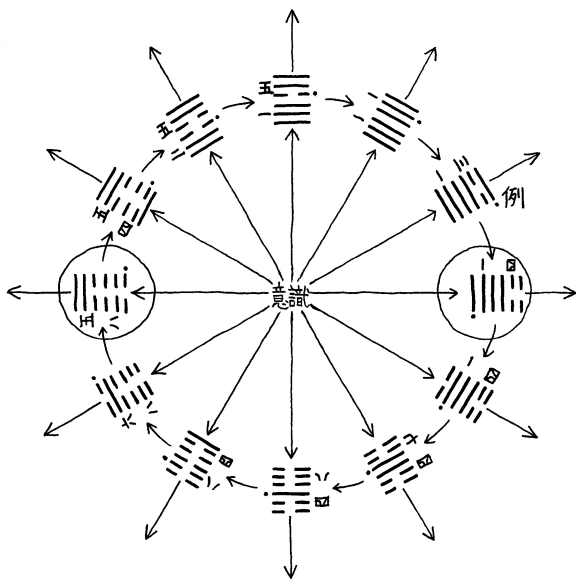
例に戻りましょう。

問いの答えとして得られたのは「三一 おおなる財産」および、「三一」の六番目の線である、「三一六 天が手をさしのべる。自然の流れにのっている。」でした。

この答えが示しているのは、一の位置から起こり始めた陰陽の反転という変化が五番目まで達して、今まさに六番目の位置にある線が、「三一」の象徴の場合は陽↓陰になろうとしているということなのです。すなおに解釈するなら六番目の位置にある線が陰になると、「四一」の象徴になります。「四一」には、「力みなぎる」という言葉がつけられており、この言葉と象徴とであらわされる新しい全体状況、新しい段階が始まると予測することができます。

立方体のサイコロが示す位置の線（例では六の位置の線）を変化させてできた象徴（例では「四一」）は、基本的には時間の流れにおける次の段階として観るのですが、問いに対する答えにおける注釈、隠れている意味のようにとらえることもあります。時間の流れとしての次の段階と観るのか、現時点の答えの背景として観るのかの判断は、これはまた、直観に頼るしかないのですが、この二つの観方の可能性が等分にあるということとは念頭に置いておいてください。

時間とは、永遠の過去から永遠の未来まで一直線にただ流れるものではなく、象徴を用いて説明するならば、ある象徴から始まって、各線がその象徴とは陰陽逆の関係にある別の象徴を経て、再びもとの象徴に戻る円環状の過程なのです。このように観ると、結局私たちは、周期という同じ輪の上をただぐるぐると歩かされているような感じもしてきます。それでは、周期という輪は永遠に私たちをとらえて離さない「牢獄」なのでしょうか。



8 グレートタイム
大時間

周期は「牢獄」ではありません。

この宇宙に「牢獄」はありません。

どうしてそう言い切れるのか。

すべては「陰」と「陽」から成っており、陰は陽に、陽は陰に、常に変転していると述べました。だとすれば、確固としたものはなにもなく、「牢獄」に見える物は意識がそのように見せているだけ、ということになるからです。

本書では、占術書における象徴（「もよう」）の並びを、文章を探しやすいようにサイコロで示される数字の順番に並べなおしてあります。もとの占術書に書かれていた各象徴の並び順は、本書における並び順と全く異なります。

このもとの並び順には、二つづつ対になっているという規則性があるのですが、ではその対単位での並び順には、なにか規則性があるのかというとそれがよくわかっていません。本当は一定の規則があつたのだが長い歴史の間にまちがいが入り込んだとか、規則はないが定性的な意味の連なりとして物語としての意味があるとか、大学の先生方の間でもいろいろなことが言われていますが、私はこれはそのまま素直に受け入れたほうがいいのではないかと、近ごろは

そんなふうに思っています。

私も、「規則」を探し出そうとやつきになっていた時期もありましたが、そもそもなにか「規則」を探し出そうとする衝動こそ、日常的な意識の産物なのではないかと気づいたからです。

日常的な意識は、混沌を混沌のまま受け止めることができません。何かの枠組みがないと認識そのものが成立しないからです。枠組み、すなわち規則です。

しかし「ひとつの物語」というとらえ方は魅力的だと思いました。規則というよりもっと柔らかな枠組みです。前述の周期のような、どちらかというと機械的な、冷たい流れとはちがひ、「ひとつの物語」という観方には、血の通った「流れ」があるように感じたからです。

そこでこの、もとの占術書における象徴の並び順を、日常的な意識が造り出す日常的な時間と対比させて、大時間グレートタイムと呼ぶことにしました。前述の「周期」はこの大きな輪である大時間の上に乗った小さな輪です。もちろん大時間は周期でも牢獄でもありません。「ひとつの物語」です。時間という言葉が入っていますが通常の意味での時間でもありません。それはそのように在りて在るものであり、宇宙そのもののなのです。

本節の末尾にもとの占術書における各象徴（「もよう」）の並び順——すなわちこの「ひとつの物語」——を番号で示しておきました。

エーテルの階層をひとつの巨大領域と観るなら、そこにはひとつの巨大意識があることにな

ります。ただこれを通常の意味で意識といっているかどうかはわかりません。たぶんちがうでしょう。しかも、この言い方には最初から矛盾が含まれています。エーテルの階層には「境界」も「領域」も、そもそもないのです。

エーテルの階層には、境界で囲まれた領域がありません。それはつまり、いかなる意味での「個人」もないということです。あるのは「ただすべて」です。そこから出て行ったものも入ってきたものもありません。

ある意味、これは大変な救いともいえるのではないのでしょうか。

なぜなら、そこには「生」も「死」も「寿命」もないのですから。私たちを造り上げている^{エーテル}おおもとは、実は、「生」も「死」も「寿命」もないのです。

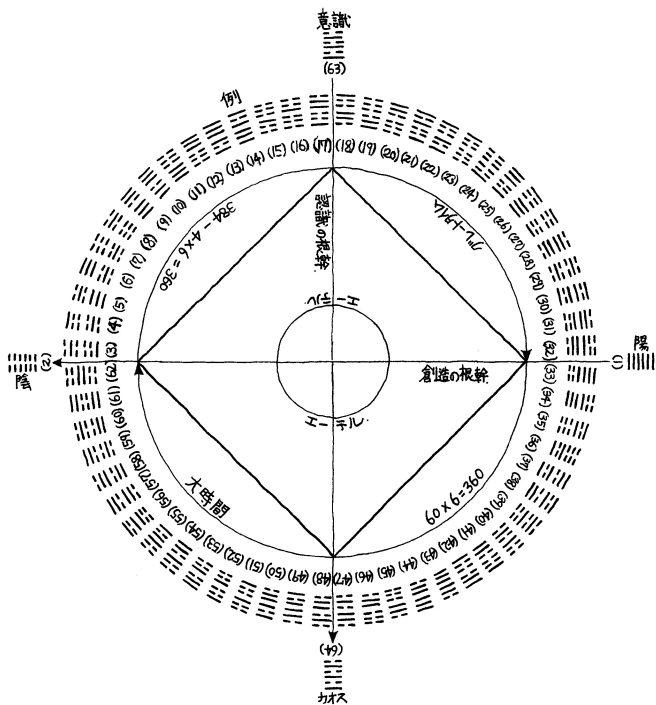
要は、自分と称される領域の境界を拡大することにより、エーテルそのものを「ひとつもの」として、「私」として、観ることができかどうか。

すべてはそれにかかっているともいえます。

それはひどく困難なことかもしれません。

しかし、ひよつとしたら、拍子抜けするくらいに単純^{ばか}かつ簡単^たなことなのかもしれません。

偉そうなことを書くつもりはありませんが、あまりに単純明快なことは、往々にしてとても難しいことと混同されやすいのかもしれません。



G33	一七	G34	四一	G35	三八	G36	八三	G37	五三	G38	三二	G39	六七
G40	四六												
G41	七一	G42	五四	G43	二一	G44	一五	G45	二八	G46	八五	G47	二六
G48	六五												
G49	二三	G50	三五	G51	四四	G52	七七	G53	五七	G54	四二	G55	四三
G56	三七												
G57	五五	G58	一一	G59	五六	G60	六一	G61	五二	G62	四七	G63	六三
G64	三六												

※ 次に示す絵では、各「もよう」の下に書かれたカッコ付きの数字(1)～(64)が、G01～G64に対応しています。

● もとの占術書における「もよう」の並び順²（「しるし」の数字順）
 （G01～G64がもとの占術書における並び順）

一 一 G01 一一一 G10 一二三 G13 一四 G25 一五 G44 一六 G06 一七 G33
 一八 G12

二 一 G43 一二三 G58 一二三 G49 一四 G17 一五 G28 一六 G47 一七 G31
 二八 G45

三 一 G14 一二三 G38 一二三 G30 三四 G21 三五 G50 三六 G64 三七 G56
 三八 G35

四 一 G34 四一一 G54 四二三 G55 四四 G51 四五 G32 四六 G40 四七 G62
 四八 G16

[illegible]

追記 反転対 (TP01↔TP32について)

ここでは各「もよう」の言葉の後に書かれたTP01↔TP32の数について説明します。「7 エーテルの形而上学」の中で、占つて、ある「もよう」が答えとして得られた場合、その「もよう」は、その瞬間のエーテルの「断面」をあらわしているのであつて、慣れてきたら、答えとして得られた「もよう」だけでなく他の六三種類の「もよう」のことも常に意識しておかなければならない、といったようなことを書かせていただきました。これは、この占術を利用する方々、とくに初学の方々にとっては、かなり無茶な要求だということは重々承知した上であえてそのように書きました。六四の「もよう」はそれ全体で宇宙全体に対応しています。質問はこの宇宙におけるあるひとつの「点」であり、答えとなるあるひとつの「もよう」はその質問に対応してあらわれたもうひとつの「点」です。サイコロをふることにより宇宙全体に広がった可能性として存在していた答えがひとつの「点」として収束したからこそ、どうにか読み取れるようになったのです。他の六三種類の「もよう」も意識してください、という私の要求は、せっかく収束した答えを、また再び、果て知れぬ全体へと押し戻し、拡散させていくようにもとれ、矛盾を感じた方もいらっしやったかもしれません。

「意識してください」という言葉をどうとらえるかによると思います、他の六三種類の

「もよう」の意味をすべて繰り入れろという意味ではもちろんありません。そんなことはできないし、無理にやったとしても、それでは答えは崩壊し宇宙全体に拡散してしまつて、とても具体的な答えにはならないでしょう。「意識してください」というのは、全体に拡散していたものが収束してひとつの答えとなつてあなたの目の前にあらわれる過程全体を念頭に置いてくださいといった程度の意味だったので、そういわれてもまだ具体性に欠けると思います。

そこで、抽象（非局所）性と具体（局所）性の間を行き来する過程を意識するための足掛かりとして反転対^{ツイストペア}というものを設定することにしました。反転対とは、ある特定の「もよう」と、その「もよう」のすべての「線」の陰陽を反転してできた、もうひとつの「もよう」とで構成される対^{ペア}のことです。簡単にいえば、互いに陰陽反転関係にあるふたつの「もよう」の組み合わせのことです。

全体としては六四／二で、三二の対があることになります。その三二の対に便宜のためP01〜P32の番号をふり、さらにそれぞれの対に特定の言葉を付与しました。これらの言葉はそれぞれのだ対を構成するふたつの「もよう」の意味がもとになつてはいますが、私が独自に付け加えたもので、もとの占術書にはこのような言葉はありません。

また余談ではありますが、反転対は、大時間^{グレートタイム}の「もよう」の並びにおける、ふたつづつの「対」とも異なります（一部重複していますが）。大時間における対は、陰陽反転^{インバース}ではなく、「もよう」そのものの上下をひっくり返した「もよう」どうしの組み合わせが基本であり、こ

の対をエーテル研究では「倒立対^{リバーシ}」と呼びます。

反転対に付与した言葉の使い方は自由です。実際に占うときには、これらの言葉を考慮してもいいし無視してもかまいません。占って回答として得られた「もよう」の背後には、まずは反転対としての、もうひとつの「もよう」があり、さらにそれを足掛かりにして、他の六二の「もよう」があつてつまりそれは「すべて」だと、宇宙全体に思いをはせていただければそれで充分かと思えます。最後に、私の研究と関連付けて言わせていただくことをお許し願えるなら、反転対は、現在のカタのエーテル均衡技術の基礎であるということをつけ加えておきたいと思えます。

※ あるひとつの「もよう」から反転対となるもうひとつの「もよう」を導くには、各「線」の陰陽を反転（切れた「線」はつながった「線」に、つながった「線」は切れた「線」に）すればいいだけです。慣れてくれば頭の中でもできます。各「もよう」に対応した数から、反転対になるもうひとつの「もよう」に対応した数を導くことも容易です。やり方は読者の宿題といたしましょう。次に反転対の一覧を示します。

TP01	四四／五五	【呼吸】	TP17	七二／二七	【問いかけ】
TP02	三三／六六	【生命】	TP18	八二／一七	【変容】
TP03	二二／七七	【振動】	TP19	一三／八六	【集い／集うこと】
TP04	一一／八八	【元素】	TP20	二三／七六	【純粹さ】
TP05	二一／七八	【ゼロポイント】	TP21	四三／五六	【リセット】
TP06	三一／六八	【心】	TP22	五三／四六	【回帰】
TP07	四一／五八	【上から下へ】	TP23	三六／六三	【はじまりとおわり】
TP08	五一／四八	【呼応】	TP24	七三／二六	【内面と外面】
TP09	六一／三八	【時間】	TP25	八三／一六	【エゴ】
TP10	七一／二八	【資源】	TP26	一四／八五	【スパイラル】
TP11	八一／一八	【鏡】	TP27	二四／七五	【課題の清算】
TP12	一一／八七	【儀式】	TP28	三四／六五	【瞑想のプロセス】
TP13	三二／六七	【ブロック】	TP29	五四／四五	【法則】
TP14	四二／五七	【痛み】	TP30	三五／六四	【停滞】
TP15	五二／四七	【ライフスパン】	TP31	七四／二五	【有限】
TP16	六二／三七	【プロセス】	TP32	八四／一五	【出会い】

8つの「しるし」



64の「もよう」と、反転対の番号(XX;TPXX)



凡例

★ 各「もよう（象徴）」の見出し

G01～G64 もとの占術書における「もよう」の順番

・◎ 上の「しるし」と下の「しるし」が同一の「もよう」

↓日常生活にかかわる普遍的な言葉を付与

・○ 上の「しるし」と下の「しるし」を構成する各線が陰陽反転関係にある「もよう」

↓日常生活における生命活動を代表する言葉を付与

・TP01～TP32 各「しるし」が属する反転対^{ツイストペア}の番号、反転対を構成する「もよう」の数字

(××／××と表記)、および、対ごとに付与された言葉（「」内に表記）

※ 右三点（・）は著者が独自に付与した言葉であり、もとの占術書にはない。

◎の言葉は、各「しるし」が示す「力」が純粹に観測できるようになった事象をあらわす。

上 「もよう」の上の「しるし」の番号とその「しるし」が持つ基本的な力

下 「もよう」の下「しるし」の番号とその「しるし」が持つ基本的な力

◆ 当該の「線」が陰、「切れた線」であることをあらわす。

◇ 当該の「線」が陽、「つながった線」であることをあらわす。

※ 著者による注釈

一一〓一八

★ 一一 GOI 力。男性（父性）原理

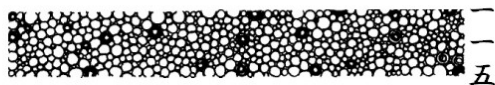
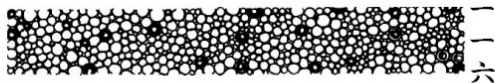
◎ 創造

TP04 一一／八八 【元素】

上 一 おどる力
下 一 おどる力

さえぎるものなし。流れにのっている。

乾



G 0 1

一一一 ◇ 隠れた龍。水面下の力。力を發揮するにはまだ早すぎる。

一一二 ◇ その偉容をあらわす龍。賢人に助言を求める。

一一三 ◇ 目前の事をひたすら誠実にこなす。その後、慎重に確認する。
不安定ではあるが、なんとか乗り切れる。

一一四 ◇ 龍、深淵からはいあがる。

一一五 ◇ 龍、天高く昇る。賢人に助言を求める。

一一六 ◇ 高く昇りすぎた龍。下るに下れず。

※ 一一（全陽）と八八（全陰）は創造の根幹であり、一一には特に次の注釈がある。
天空に龍の群を見るが、すべての龍に頭がない。しかしそれは、よいことである。

白橋 升

夏がはじまりおわる
ころ

ウミはその名前と裏腹に海に出たことなど一度もなかった。日がな一日、ただ海を眺めているだけ。そんな青年の前に、見ず知らずの、ひとりの子供が現れる……ちよつと不思議なひと夏のお話。

白橋 升

夜の石は天に昇り
空ゆく星に会えた

あなたのようなぼく、ぼくのようなあなた。ぼくとあなたでこの宇宙ができているのだとすれば、ぼくとあなた。それがすべて。旅している人に。旅が好きな人に。これから旅をしようとしている人に。

白橋 升

大きな櫟の樹の下に

均衡世界シリーズ
に迷いこんでしまう。はたしてそこは……

カタ中央大学 ユウキ・シンダイ大教授
ほんとうのこと、または、
でたらめの書

均衡世界シリーズ

「大きな櫛の樹の下に」に登場した占いの
本を忠実に再現。ホノワール・オモタ氏が
手にした不思議な本が、あなたの手にも。
シンダイ大教授の懇切丁寧な説明付きです。
物語の続きはぜひあなたの手で！

白橋 升

ミネリの銘板

均衡世界シリーズ

「大きな櫛の樹の下に」続編登場！舞台は
オモタ氏がカタドウリへと帰った一〇年後
のカタ。古書店を手伝うミオは偶然出会っ
た年上の女に、面倒にまきこまれそうなど
ころを救われる。女は実は「魔女」で……

以下続刊

